

# 分析哲学の勃興とグルーのパラドックス

片桐奏羽<sup>1</sup>

本レポートでは分析哲学の勃興について簡潔に述べた後、グルーのパラドックスについての自分の考えを述べる。

## 分析哲学の勃興

分析哲学には二つの特徴がある、一つは厳密な論理を使用する（分析することと、もう一つは経験的事実に基づく実証主義の傾向である。これらの特徴を備えた20世紀初頭の論理実証主義が分析哲学の始まりとされる。

実証主義的傾向は論理実証主義以前に、エルンスト・マッハによって、学問の役割を経験的な事実を法則によって整備することにあるという「思惟経済」の考え方によって提起されていた。哲学においても、形而上学的な独断を排し、経験に基づいた事実を論理的に厳密な思考によって分析することによって哲学の科学化を目指そうとする動きが1922年、モーリッツ・シュリックを中心としたウィーン学団によって展開され、論理実証主義と呼ばれるようになった。

こうした実証主義とは無関係に、19世紀に数学の論理学を用いて基礎づける「論理主義」を展開したゴットロープ・フレーゲによる現代論理学が誕生していた。フレーゲは命題論理（真もしくは偽の真理値を持つ命題を結合子によって組み合わせたものについての真理値を計算する方法）と述語論理（ $\forall$ や $\exists$ といった量化子を用いて量を表す表現を導入したもの）を導入した。

現代論理学はバートランド・ラッセルによって更に発展させられ、かつ経験論と合流した。ラッセルの弟子であるルトヴィヒ・ウィトゲンシュタインは『論理哲学論考』において世界を命題論理で明晰に記述できるものとし、形而上学については命題として明晰に語れない以上、語りうるものを明晰に表現してそ

---

<sup>1</sup> So.katagiri@gmail.com

の存在を示唆する以外に方法はないことを示し、哲学の世界に「言語論的転回」をもたらした。

論理実証主義は「哲学の科学化」するための方法論を『論理哲学論考』の影響による「語りうるもの」すなわち事実についての明晰な言語化に定めた。ここでは形而上学的命題を疑似命題として退ける一方で経験に基づく科学のような総合命題が有意味な命題であるとされ、総合命題は体験的な所与に還元されるという還元主義を唱えた。

しかし、経験への還元を徹底した場合、最終的に何に還元されるのかという問題(プロトコル命題についての論争)を通じて論理実証主義は行き詰まりをみせ、最終的にナチスによる弾圧により主要メンバーがアメリカに渡ることによって論理実証主義運動は消滅した。

論理実証主義の方法論自体もウィラート・ヴァン・オーマン・クワインの「経験主義の二つのドグマ」において全面的に批判された。クワインは還元主義のような基礎づけを否定し、自然科学と哲学を同列におき、科学を積極的に用いて哲学を議論する「哲学の自然化」プログラムを提唱した。

今日、経験科学や論理と結託した形で、明晰な議論を心がけるという特徴を残しつつ、分析哲学は様々な領域へと浸透している。そこでは形而上学や倫理学のような論理実証主義が排除した主題も扱われている。

## グルーのパラドックス

グルーのパラドックスとは、ネルソン・グッドマンによって提起された帰納にまつわるパラドックスである。それは以下のようなものである。

1. 今まで得られていたエメラルドはすべてグリーンだったとする（「グリーン証拠」）。
2. すべてのエメラルドはグリーンであるという法則についての仮説（「グリーン仮説」）を主張する。

3. グリーン証拠はグリーン仮説を確証しているように見える。
4. しかし、「グルー」という述語を導入し、 $t$  を現在とし、ある時刻  $t$  より前にグリーンで  $t$  より後にはブルーである色とすると、グリーン証拠は今までえられていたエメラルドはすべてグルーであるという「グルー証拠」でもあることになる。
5. すべてのエメラルドはグルーであるという法則について仮説（「グルー仮説」）を導入する。
6. グリーン証拠はグルー証拠であり、これをもとにグリーン仮説に従うなら、これから発見されるエメラルドはすべてグリーンであるが、グルー仮説に従うなら、これから発見されるエメラルドはすべてブルーであることになり、パラドックスが生じている。

これには更に、ある時刻から前にはブルーである時刻から先はグリーンであるグリーンを導入することで、グリーンという色のほうがある時刻から前はブルーである時刻からグリーンであるような述語であるようにいうこともできる。

この問題は、エメラルドがグリーンであるという言明に時刻に関する曖昧さが含まれていることが問題であると考えられる。例えば、エメラルドがグリーンであるということはある時刻より前にグリーンであり、ある時刻後にもグリーンであると言ったときに、グリーンという言葉が二種類の意味で使われていることがわかる。つまり、永続的なものと、瞬間的なものである。よって、正しくは、永続的なグリーンには時間の関数であることを明示してグリーン ( $t$ ) と書く事にして、ある時刻  $t_0$  における瞬間的な色をグリーン( $t_0$ )と書けば、

グリーン証拠は初期条件グリーン( $t_0$ )を与えているに過ぎないことがわかる。グリーン証拠がグルー証拠であるということは初期条件がグリーン( $t_0$ )=グルー( $t_0$ )であることであり、エメラルドの色をエメラルド( $t$ )と書く事になると、この初期条件からエメラルド( $t$ )の関数形がグリーン( $t$ )であるかグルー ( $t$ ) であるかを決められないのは自然である。仮にこれが決定できるとすれば、エメラルド( $t$ )の時刻についての微分方程式、すなわち運動方程式が与えられている場合が考えられる。

エメラルドの色の運動方程式が与えられているということはエメラルドの色の時間変化が与えられているという事と等価ではない。エメラルドの時間変化が与えられているとすればそれはエメラルド(t)の関数形そのものが与えられているということであり、未来に至るまでのエメラルドの時間変化を知らなければ決められないが、運動方程式は任意の時刻に成立する。ただし、この運動方程式自体は天下りにしか与えられない。

ちなみに、グリーン、ブルー、グルー、ブリーンは階段関数を用いて

$$\text{グリーン}(t) = \text{グルー}(t) (1 - \theta(t)) + \text{ブリーン}(t) \theta(t)$$

$$\text{ブルー}(t) = \text{ブリーン}(t) (1 - \theta(t)) + \text{グルー}(t) \theta(t)$$

$$\text{グルー}(t) = \text{グリーン}(t) (1 - \theta(t)) + \text{ブルー}(t) \theta(t)$$

$$\text{ブリーン}(t) = \text{ブルー}(t) (1 - \theta(t)) + \text{グリーン}(t) \theta(t)$$

のように書く事ができるが、定義が循環しておりそれぞれの関数形は決まらない。

#### 参考文献

一ノ瀬正樹『功利主義と分析哲学』

石本新「ラッセルと認識論」『ラッセル協会会報』n. 14(1970年3月)pp. 3-5.

<http://www005.upp.so-net.ne.jp/russell/ISHI3-01.HTM>